

文化の時代は多様化の時代
～多国籍化と地域活性化への取り組み～

経営トップ講義

@県立大 2019~20

「ビジネス経済の実践」要旨

①



九州教具代表取締役社長

ふなはし しゅういち 船橋 修一氏(60)

「現代には、学問や学歴ではなく、『人の役に立つ学び』が必要」と話す船橋代表取締役社長 〓県立大佐世保校(山下哲嗣撮影)

県立大地域創造学部実践経済学科2年生を対象にした「ビジネス経済の実践」は、県内の経営者らが講師を務め、企業の理念や戦略について具体例を交えて語る。本年度は14人が登壇。来年1月28日までの講義の要旨を紹介する。

◆ ホテルの経営やミネラルウォーターの製造・販売などさまざまな事業を手掛けている。社名にもあるように、元は文具店だった。1946年に創業し、私は3代目。創業者の本田嘉末は、

朝鮮半島の国民学校の校長だった。終戦後大村市に引き揚げた。大村湾の海水で塩を作って資本金をため、戸板に文具を並べて売ったのが始まりだ。当時から経営理念には「社会に貢献すべし」とある。今でこそ一般的だが、自分たちも食べるのに困る時代だったから極めて珍しかった。CSRは、企業の社会的責

任を意味する。清掃や地域の祭りに参加するなど、企業が責任を自覚し、社会への利益還元が目的だ。問題は、これを余った時間とお金でやっていることだ。経営状態がよくないとすぐに削られる。そこで、CSV(共有価値の創出・創造)経営を進めている。ボランティアではなく、町づくりをビジネス化するイ

メージだ。利益を社会に、わが社に還元する。これは大事だ。ホテルを自ら運営することでもさまざまな問題を経験し、解決する。これは事務機器の販売専業では実現できない。ホテルはいわば実験場だ。なぜ東彼波佐見町にホテルを建てたのか、よく聞かれた。「地元の人が何にもない」という田園に囲まれた田舎に建設したのは、外国人はこういう風景にこそ感動すると確信したからだ。日本の原風景が波佐見町にはあった。ホテルを起爆剤に地方が活性化すれば、すばらしい。ここをわが社のCSV経営の第一号にしようと考えた。

外国籍の社員は全体の1割ほど。積極的に登用している。中国人社員はホームページの中国語対応を手掛け、米国人社員は清掃マニュアルを英文で作り上げた。2018年には経済産業省から「高度外国人材活躍企業50社」に選ばれた。現代は、正解が用意されている「経済の時代」から決められた答えのない「文化の時代」に移行した。外部を排除することで発展した時代は、成長に陰りが見え始めている。排除に代わるキーワードは「社会的包摂(ほうせつ)」。インクルージョン(包摂)とは弱い立場の人も含め、市民一人一人が支え合う考え方だ。あらゆる人々の潜在的な創造力を顕在化させる意味では、ダイバーシティ(多様性)よりも一歩進んでいる。

社会的包摂 発展の鍵

〓次回(11月6日)に掲載します 〓 (後藤洋平)